

秋 分 儀 式

I O S 儀式魔術文書 AE12A



THE OFFICIAL ORGAN
OF

I O S

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE AUTUMN EQUINOX CEREMONY FOR ASTRAL WORKING

I O S ASTRAL TEMPLE WORKING

第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が、簡易な準備で行える霊的集合儀式(Astral Temple Working)として作成した。従って、実行儀式よりも簡略化した部分がある。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は、原則的に春秋分点の前後48時間以内に実施すること。2012年の秋分点通過は9月22日(木)23時49分(日本標準時)である。儀式内容は、中世の実践カバラを準用して秋分の祝祭を実施する。

1 中世の実践カバラ

(1) 夜明け前の光

アッコンのラビ・イサク(・ベン・シュムエル)は、13世紀後半から14世紀初頭にかけて地中海世界を流浪した「彷徨するカバリスト」と呼ばれた著名な人物である。かれはカバラの学習を始めたガラリヤ地方の港湾都市アッコンから、スペインへと旅行し、次に北部アフリカを遍歴した。⁽¹⁾ イサクの人物像を語るものは少ない。数冊の著作と僅かな逸話が残されたのみである。しかし、かれは現代のカバラの原型を構築したカバリストのひとりである。「夜明けの直前に、眠りに落ちながら、眠りのなかになく、秘密を見た。」というかれは、離散のユダヤ人に夜明けが来る前に、人々を照らす微かな光であった。

(2) 実践魔術の系譜

13世紀は魔術的な伝統が急速に発展した時代でもある。古代末期のヘハロース文書や、その後のラビ文学では、壮麗な呪文や、神秘の業が語られるが、具体的な技法、儀式進行の手順等は殆ど言及されない。中世のユダヤ人コミュニティのなかで、正確な技術を伝承する動きが発生した。

イサクが強い影響を受けたとされるアブラハム・アブラフィアは、非常に多くの技法を残している。たとえば、アブラフィアは神聖名の操作において、筆記、発話及び思考の3段階で文字が現れるとし、筆記の段階では夜を徹して神聖文字を筆記し、結合する様子が語られる。発話の段階では、第1に神秘体験を得ようとする者は文字を詠唱し、音声化する。第2に呼吸のリズムを維持しなければならない。第3に発音された文字が音声化されるに伴い彼の頭部は動かねばならない。第4に人間の内部構造について観想しなければならない。等々・・・⁽²⁾

また、ボアズ・フスは同時代を特徴づける傾向は「解釈の多形態化の仕組み(multiform systems of exegesis)」であるという。著名な例としては、「PaRDeS法」がある。この単語は、「平文(Peshat)」、「暗示(Remez)」、「訓戒(Drasha)」及び「秘密(Sod)」の頭文字を集めた略語である。このほかアブラフィアが愛用した7重の技法等があり、アッコンのイサクは「ニサンの四道」と呼ばれる手法を用いた。

ニサン(N)snは、「隠れた(Nistar)」、「秘密(Sod)」、「真実(Emet)」及び「正しき真実(Emet Nekhona)」の頭文字を集めた略語である。

ニサンの第1の道は「隠れたる道(rtsnh Krd l())」と呼ばれ、人間界に位置づけられる。心理学的又は知性的機能を用いた翻案である。イサクは「これ(hz)」と「異邦人(rz)」という単語を対比して説明した。

第2の道は「秘密の道(dwsh Krd l())」と呼ばれ、天使界に位置づけられた。特に大天使メタトロンに関連し、イサクは「秘密の道によれば<これ(ゼー)>は、モーシェ、すな

(1) Moshe Idel, *Absorbing Perfections*, New York : Vail-Ballou Press, 2002, pp.449-460, Appendix 3 R. Isaac of Acre's Exegetical Quandary.

(2) Moshe Idel, *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*, Albany : State University of New York Press, 1988, pp.23f.

わちメタトロン、顕現の宰相に関連する。」と述べた。⁽³⁾

第3の道は「真実の道 (tm)h Krd l()」と、第4の道は「正しき真実の道 (Nwknh tm)h Krd l()」と呼ばれた。この上位の道は、セフィロト界に属する。

真実の道は主に下位の7セフィロトに関連し、イサクは「真実の道は義人(ツァディク)と冠(アタラー)に関連し、新月祭ロシュ・ホデスにおけるイスラエルは義人と花輪の中のティファレトに結びつけられる。」という。この「(花輪の)冠(hr+())」(『サムエル記下』12:30『詩篇』21:4等)という単語が頻発するが、マルクトに現れるとされる(女性的な)神聖の顕現シェキナーと同一視されている。

一方、正しき真実の道の解釈ではセフィロト界の全体が用いられる。すなわち、「イスラエルは大いなるものゲドゥラーと畏れパカドに、さらにはコクマーとピナーに結びつけられる。」と言及した。

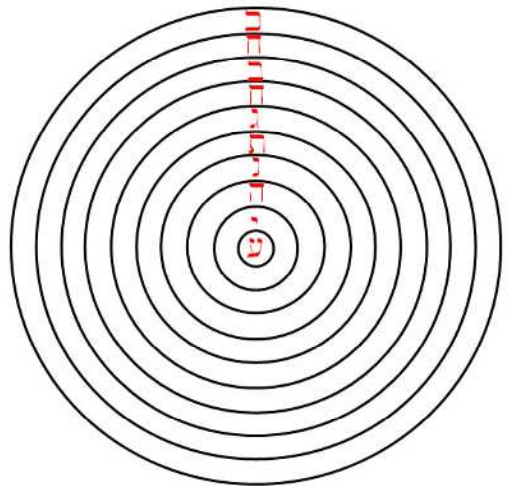
さらに四道の上位に「完全の道 (twllkh Krd l())」を模索した。⁽⁴⁾

その上で神秘探求のマニュアルを作成した。かれの著作では次のような幻想的又は献身的な技法が説明されている。⁽⁵⁾

第1に神聖なるセフィロトを通過する意識の移動、旅行及び巡礼
第2に2元的な集中及び固定した意図の性質
第3にセフィロト的領域の視覚化及び神聖名による瞑想

意識の旅は「二つの開始点」を通過することで始まる。二つの開始点とはセフィロトのゲドゥラー(ケセド)及びパカド(ゲブラー)である。かれは地上の意識から出発する旅人に「十円図」を見せた。この図は十の同心円が重なるもので中心の円がマルクトを、最外周の円がケテルを意味した。各円にはセフィラの頭文字(マルクトのみアタラーの頭文字)が付されていた。この曼荼羅的図版を通して、旅人の意識を変容させ、中央の光を通して神の天上の館に到着する。

旅人は「祝福あれ(Kwrb)」と言い、一礼しなくてはならない。そして、「二つの開始点は、六つの開始点に変わる」六つの開始点とはイエソドからケセドまでの6セフィロトである。ここにおいて、旅人は地上的意識の到達できる最高点であるピナーに辿り着く準備を完了する。最終的には合一化(unification)は、ピナーからコクマーへ、ケテルへ、そして「始まりなき開始/終わりのなき終焉」たるアイン・ソフに辿り着く。



セフィロトへの意識照射はきわめて複雑である。タルムードに「祈る者は視線を下方に向け、心臓を上方に向けよ」という有名な言葉がある。ソロモン・イブン・アドレットの学舎では、これを「祈る者は視線を下方、アタラー(マルクトにあるシェキナー)へ向けよ。・・・その心臓を上方のテシュヴァー(ピナー)に向け、流れをティファレトへ、ティファレトからアタ

(3) ウルフソンは、MoSheとメタトロン・サル・ハ・パニムを同一視する解釈はアブラハム・アブラフィアが示したと記述している (Elliot R. Wolfson, *Language, Eros, Being: Kabbalistic Hermeneutics and Poetic Imagination*, New York: Fordham University Press, 2005, pp.137, 487, n.209.)。

(4) Boaz Huss, "NiSAN-The Wife of the Infinite: The Mystical Hermeneutics of Rabbi Isaac of Acre", in *Kabbalah* 5(2000), pp.155-181.

(5) Eitan P. Fishbane, *As Light Before Dawn: The Inner World of a Medieval Kabbalist*, Stanford: Stanford University Press, 2009, p.181.

ラーへ引き下ろせ。」と教えていた。イサクは「アタラーに薫香を献ずるとき、祭司は意識をティファレトから離すことを許されない。薫香及び供物を献納する（意図の）精髓は神聖名にあるからだ。そして、祝福されし流れをティファレトからアタラーへ、彼女から下方世界へ引き下ろす。」と説明し、ティファレト／アタラーの2重の焦点を明確化した。別の記述において、イサクは「薫香を献ずる者の集中力は、直接的に<二つの貌（Nypwcrp wd）>の完全な合一に指向すべきである。」と述べた。⁽⁶⁾

また、アブラフィアの伝統を継承し、ヘブル語の発音記号を駆使して神聖名の結合を行った。聖四文字にアレフを追加し、それを2つ並べた神聖名は次のとおり（発音記号は省略）。⁽⁷⁾
) hwhy) hwhy ヤーヘヴァーファーヘヴァーヒ（アレフは無音）

2 司官の配置

（1）司官の指定

本儀式に必要な司官は、PRAECEPTOR（PC）、すなわち「先導者」の1名である。

PCは、黄金の夜明け団の伝統的な白の法衣を纏い。白のネミスをかぶり、マントやその他の役職記章はつけていない。右手に「ハイエロファントの棒」をもつ。それは神殿を開き、つなげる権威の象徴である。

他の参列者は、内陣団員は白の法衣と白のネミスを、外陣団員及びプロベিশヨナーは、黒の法衣と白黒縞のネミスをかぶり、手には何も待たず参集する。

ディオン・フォーチュンの内光協会のアストラル神殿儀式では、参集者は儀式場に座ったまま、光体（かれらはアストラル体と呼称）を下位アストラル神殿に投射する。そのとき光体は全裸であり、神殿の着衣の間（Robing Room）において、光の法衣を纏う。

（2）トラーの宰相の召喚

司官は、マルクト神殿で律法の公爵を召喚し、メタトロンの顕現たる大天使の長上が「肉の衣を去る」までは、実効上の神（天使を使役する者）として活動する。この場合「肉」とは、魔術師の「光体」のことである。

3 アストラル神殿の構造

マルクト神殿を使用する。

4 魔術の技法的側面

（1）封印の受肉

起誓言などを多用するメルカバ神秘主義において、「封印（Mtwx）」は護符（amulets）に記されて術者が携行するほか、術者の肉体に直接書き込まれる場合があった。⁽⁸⁾

マーヴィン・メイヤーらは、コプト語呪文の研究のなかで、ギリシャ語の聖なる七母音が神像の胸に入墨されている例を示した。⁽⁹⁾

バル・イランは、『マセー・メルカバ』の「七の封印」を例にとり、次のように述べた。
「封印がどのように刻印されたか、さだかではない。祈祷する神秘家の四肢に封印が刻印され、

(6) Fishbane, op. cit., pp.214f, 221f.

(7) Fishbane, op. cit., pp.234ff.

(8) Janowitz, *Icons of Power*, pp.79f.

(9) Marvin Meyer, *Ancient Christian Magic*, Princeton : Princeton University Press, 1999, pp.231, 280.

神聖なる霊視を得るための不可分的手段となっている。」⁽¹⁰⁾

(2) 聖四文字の呼吸

聖四文字の呼吸においては、ペリマーが世界が流出を開始する以前の「無の性質」に直結し、マーが流出後の「有の性質」を表現する。

呼吸法において、hy を詠唱する際は、「ヨー・ヘー」と発声する。瞑想中は、呼吸する際に喉を空気が通る音ぐらいの高さで囁く。息を吐きつつヨーと詠唱し、息を吸いしつつヘーと詠唱する。その際は、心中にそれぞれの文字を視覚化する。⁽¹¹⁾

息を吸いながら発音するのは難しいが、無理に大きな声を出す必要はない。その音は術者の心のなかに響きわたれば良いのである。

今回は、すでに境界を跨いだアストラル・ライトのなかで、「無の性質」を象徴するヨド・ヘーの呼吸と「有の性質」を象徴するヴァウ・ヘーの呼吸を併用し、祭壇の上に「有と無の融合」を現出させる。

(3) 呪歌の力

本儀式においては呪歌を使用する。

ヘブル語においてシーラー hry# (複数形シーローズ twry#) とはシャントを意味する言葉である。『申命記』第31章に説明されるとおり、折りに触れユダヤの民が歌うようにと定められた歌のことだ。

ラビ・シェファール・ゴールドによれば、シャントの恍惚体験は全き献身による観想的空間への移行を可能とする。観想的沈黙の文脈のなかにおいてシャントの力が深化し、発展するための空間が作り出される。シャントは『詩編』23章5に示された「溢れる盃」(コシ・ルバヤ hywr yswk) である。そして、あふれる盃には2種類があり、シャントを唱える者たちのなかに生成される。

第1の盃は、各人の心臓の上にある内的な盃であり、盃には生命と愛の源泉から途切れることのない流れが注ぎ込まれあふれ出ている。シャントは、その流れと自分自身を再結合する。

第2の盃は、シャントを唱える集団のなかに生成される。唱和するシャントの音と、注意力の共有が盃を生む。その盃には神聖な流れが注ぎ込んでおり、集団に属する誰でも盃からあふれる神聖な流れに触れることができる。⁽¹²⁾

(4) 詠唱の力

ヘブル語の神聖名は、文字として書かれた場合でも声に出して歌うのと同等の効力を発する。しかし、シャントを正しく用いると特別な効果が生じるのは前出のとおりである。

一方、ヘハロース文学によくある長い呪文は、シャントではなく詠唱(Hymns)で行われた。それは深く感情をこめ物語られたのである。詠唱部分以外の説明文を読むと、言われた(アマール)とか、物語られた(シローズ)と書かれてある章句は詠唱である。⁽¹³⁾

『マナセの祈り』に曰く「神は深淵を閉じ、力強く誉れある自らの名で封印した」⁽¹⁴⁾

(5) 感覚の遮断

ある無記名のカバリストはヒトボデドゥースの要点は目を閉じることだと述べた。⁽¹⁵⁾

室内を暗くして黎明視を求めるのも、ほぼ同等の行為であるが、感覚が遮断され、物理的な

(10) Lesses, *Ritual Practices to Gain Power*, p.317f.

(11) Gershon Winkler, *Magic of the Ordinary*, Berkley: North Atlantic Books, 2003, p.30.

(12) Rabbi Shefa Gold, "That This Song May Be a Witness : The Power of Chant", in *Meditation from the Heart of Judaism*, Woodstock : Jewish Lights Publishing, 1997, p.85.

(13) Peter Schafer, *The Origins of Jewish Mysticism*, Oxford : Princeton University Press, 2011, p.246.

(14) The Player of Manasseh, in *The Old Testament Pseudepigrapha*, New York : Doubleday, 1985, p.634.

(15) Idel, *Studies in Ecstatic KABBALAH*, p.134.

世界から隔離されることで、幻視が深まる。瞑想中は、目を閉じて、または、半眼となっていて、
ることが望ましい。むろん、所作を伴い、危険のある場合は異なる。

(6) 黎明視

視覚情報の混乱による幻視「シャルル・ボネ諸侯群⁽¹⁶⁾」、言語入力の混乱、呪文の反復（単純類似構音の連続による記憶操作⁽¹⁷⁾）などを利用する。

(7) 祭司の手

アブラフィアは、『セフェル ハ・ヘセク』において、手を動かす作法を論じた。⁽¹⁸⁾

「両目を天に向け、左手と右手を天に掲げよ。あたかも祭司がなすように、（10本の）指を分け、5本を一方に、5本を他方に向けよ。左手の2本と、右手の2本（つまり、両手の）の小指（ケミザー）と薬指（ツェレト）をひとつにし、反対側の2本もひとつにする。両者を分け、親指は立てたままとする。・・・そして、神のもとにあげていた両手をただちにおろし、10のセフィロトを思いつつ、5つのセフィロトが5つのセフィロトの上にあるように、左手を心臓の上に置き、右手をその上に置く。」
両手の10本の指はセフィロトに照応し、開いた手はメノラーのかたちをしている。



5 身辺の準備

(1) 部屋の準備

部屋を暖かくし、プライバシーを保護できるような態勢づくりをする。（家族に部屋に入らないように断ってからドアの鍵を閉める等）、携帯電話、アラームの類はあらかじめ切っておく。部屋の中央に快適な椅子か、ソファを置き、その他の不要なものを片づける。

部屋を薄暗くする。小さな照明を利用する場合は、背後に置き、その光を直視しないように配置する。

何度も反復して練習し、象徴や、儀式の細部まで呑み込んでいても、外部の妨害ですべてが台無しになることもあり得る。準備は、怠りなく。

(2) シナリオ

今回も、シナリオ文書を単純化したので記憶してもらいたい。黎明視の妨げとなるので、テープの録音も不要である。

あなたの行動する部分は緑の文字で記してある。

神聖名を発音するときは、注意深く行うこと。

事前のリハーサルは勿論、必須とも言える。

(3) 直前の手順

開始する前に手を洗い（儀式的沐浴）、法衣（または身体を締め付けない服装）に着替え、LBRPを行って椅子に座り、中央の柱の行法で活性化する。

(16) <http://jiten.com/dicmi/docs/k12/17252s.htm>

(17) グザヴィエ・スロン『認知神経心理学』白水社、1995年、63、64頁。

(18) Idel, *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*, pp.29f.

第2章 儀式

1 神殿への入場

この準備的作業は、光体のレベルではなく、生身の肉体で行う。

参加者は、東に面して座り、目をかすかに開き（いわゆる半眼の状態）にする。視線は足下に落とし、家具などの周囲の状況が明確に像を結ばないようにする。瞼を開く程度を変えて、この焦点を結ばない状態を維持する。気持ちが悪くなった場合は、普通に眼を開いて、もう一度調整する。

半眼のまま、深く呼吸をする。呼吸は肺だけではなく、全身の皮膚を通して行う。一息ごとに、喉や鼻孔のみならず、全身の皮膚から、周囲に満ちている生気が肉体に吸い込まれ、全身の細胞を活性化させる。

あなたは光のトンネルを通過して、アストラル神殿の外庭に着地し、扉の前に立つ。マルクト神殿のヤキンとポアズの柱を通過し、青銅の扉に面すると、扉の表面に刻まれたI O Sの三文字が内側から光を発し、扉は音もなく両側に開く。

神殿の内陣広間に通じる廊室において、兄弟姉妹たちが集っている。

2 ウシャブティ

先頭に立ち、集まった参加者を振り返るP Cが静かに命じる。「ウシャブティを纏うべし。」P Cは、率先して「小神像（ウシャブティ）」を纏う。

すなわち頭頂の光球から光を拡散し、やわらかな膜のような形に引き延ばして、喉の光球に結びつけ、さらに胸と背を通して、胴の光球を振動させ、腰を振動させ、最後は足下の光球を振動させ、全身をひとつの巨大な光の膜で包み込んでしまう。その無定型のオーラの卵を好みの神、天使、神話の形態に変化させる。この場合は、司官は顔のないアケファロスの姿形をまとう。参加者は、文字通りエジプト神話の代理神像である直立した人間の姿をもつ霊的姿形を纏う。

P Cは、廊室の中央の扉をくぐり、本殿に入る。

兄弟たちは、廊室でしばし準備のできるのを待つことになる。

3 物見の塔の儀式

P Cは、祭壇の西側に回り込む。自らのオーラを広間全体に広げる。そして、拡張した白く輝くオーラを保持したまま、小五芒星の追儼儀式を行う。

引き続き、小六芒星の追儼儀式及び物見の塔の儀式を行う。

参加者は、その動きを廊室から、おぼろげな円運動による渦の発生として捉える。詳細なP Cの動作を視覚化する必要はない。

4 入場及び宣言

P Cは神殿の西の壁を背にして、東を向き合図の鈴を鳴らす。

P Cの霊的な鈴の合図で、参加者の入場が始まる。

兄弟たちは右側、すなわち南の壁際に立ち、姉妹たちは左側、北の壁際に立つ。

P Cは、内側を向いたまま次の言葉を宣言する。

P C：「I O S の兄弟姉妹たちよ。秋分の儀式を開始せん。」

5 律法の宰相の召喚

PC：「七つの封印を光体に刻印せん。」

PCは聖なる名前を唱えたあと、剣指をつくり、揃えた両膝に当てる。

参加者もPCの動作に倣う。

PC：聖名とともに唱える。「アブリース ススティイー。わが脚を封じる。」
(yytss syr w)

全員：「わが脚を封じる。」

PC、参加者は剣指を心臓に当てる。

PC：聖名とともに「アバグ バググ。わが心臓を封じる。」(ggb gb)

全員：「わが心臓を封じる。」

PC、参加者は剣指を右肩に当てる。

PC：聖名とともに「アリム ティパー。わが右腕を封じる。」()pyt Myr)

全員：「わが右腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を左肩に当てる。

PC：聖名とともに「アブリース セシー イアー。わが左腕を封じる。」

(h)y yst syr w)

全員：「わが左腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を首に当てる。

PC：聖名とともに「アビス セル バグ エル ヤーブ ドゥーエル。わが首を封じる。」

(l)wyd wyy r) gb lt tyb)

全員：「わが首を封じる。」

PC、参加者は両手を胸の前で組む。

PC：聖名とともに「アブ バク キテル スス エイカド ヤドヤド ヤー。わが生命と
すべての部分を守護するために。」(hy dydy dx) ss r+yq K)p w)

全員：「わが生命とすべての部分を守護するために。」

PC、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。

PC：聖名とともに「オーブ パス ヤーウ キーブ ヨー ザハブ ヤーウ ティティス。
わが天蓋を封じる。」(styt why whz wy wyx why tp Pw)

全員：「わが天蓋を封じる。」

PCは封印の完成と律法の宰相への呼びかけを行う。

祭壇の傍らにいるPCの上に覆い被さるように出現する巨大な天使の像がウシャブティを呑み込む。アケファロスの顔のないオーラに、律法の宰相のテレズマ的姿形が融合し、再形成されてPCの霊的外形が急激に変化する。

PCが宣言する。

PC：「われは、聖なる五つの文字に表象される無敵の一者なり。

四風を聖化するは、われなり。

五界を結ぶは、われなり。」

6 四風の聖化

P Cは東を向いて宣言する。

「I O S の神殿に四方位の風を召喚せん。」
神殿の東壁の中央に扉が現れた。

P Cは、東に向い高らかにヘブル語を詠唱する。それは、四方位の風をふるわせる呪歌である。

P C：「エロウイイー

(yhl) わが力の根元よ。)

ネシャマー・シェー・ナタフター・ビー

(yb twhtw)n h)w# hm#n 汝が授けし息吹よ。)⁽¹⁹⁾

テホラー・ヒー

(yh hrh+ そは清浄なり。)

アター・バラター

(ht))rb ht) 汝がそを創造せり。)

アター・ヤツアルター

(ht) rcy ht) 汝がそを形成せり。)

アター・ネファクター・ビー

(yb ht) xpn ht) 汝はそを我に吹き寄せる。)

ヴェ・アター・メシャムラー・ブキルビー

(wrqb trm#m ht)w また、汝は我がうちにあるそを監視する。)

ヴェ・アター・アティード・リット・ラー・ム・メフニイー

(ynpmm w)l+l d+) ht)w また、汝はいつかそを我より取上げる。)」

全員：「バラフター・ヴェ・ヤツアルター

(ht) rcyw ht))rb 創造と形成)」

P Cは、東の方向に宝瓶宮のサインを描く。

P C：「ヒー・ネイ・ニー (yn hnh われはここに)

ヒー・ネイ・ニー (yn hnh われはここに)

ヒー・ネイ・アーニー・ヤー (hy yn) hnh われはここに、神の息吹の)

アナ・ホウシーアー ((#why hn) 加護のあらんことを)」

全員：「ヤー・アナ・ホウシーアー

((#why hn) hy 息吹の加護あらんこと)」

P Cはヨド・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。

P C：「ヨー」(呼気)「ヘー」(吸気)「ペーリー・マー」(無の性質を強く意識する。)

全員：「ヨー」(呼気)「ヘー」(吸気)「ペーリー・マー」(無の性質を強く意識する。)

東の壁いっぱい、黄色い照り返しを浴びた雲海がひろがる。

雲海は下から湧きあがる雲の断片で沸騰するようだ。

その黄色い雲の渦の中心に、仄かな薄暗い陰が生まれる。

その陰は人型をつくる。人型の頭部が紫色の光を放つ。

(19) 来る()wb) の変化形(yb)は、「豊が我がうちに入りたり(xwr yb)btw)」(『エゼキエル書』2：2)のように使われる。

これはエロヒムの影だ。

P Cは、祭壇の南に回り、南の方向に獅子宮のサインを描く。

P C：「アーニー・ポー (whb yn) われと名前なきもの)
アーニー・ポー (whb yn) われと名前なきもの)
エロヘイ・イスラーエル (l)r#y yhl) 主の力よ)」

全員：「エロヘイ・イスラーエル (l)r#y yhl) 主の力よ)」

南の壁いっぱいに、紅蓮の炎が燃えさかる。

爆発的な溶岩の噴出、燃え上がる硫黄の噴煙を炎の陰に垣間見る。

その炎の壁のただなかに、巨大なたてがみのある生き物が見える。

強靱な爪のある筋肉の束が炎を掻き分ける。

それは獅子のすがたをもつ炎である。

P Cは、祭壇の西に回り、西の方向に天蠟宮のサインを描く。

P C：「アーニー・ポー (whb yn) われと名前なきもの)
アーニー・ポー (whb yn) われと名前なきもの)
ホウシーアナ (hn) (#why われを助けよ)」

全員：「ホウシーアナ (hn) (#why われを助けよ)」

P Cはヴァウ・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。

P C：「ヴァウ」(呼吸)「ヘー」(吸気)「マー」(有の性質を強く意識する。)

全員：「ヴァウ」(呼吸)「ヘー」(吸気)「マー」(有の性質を強く意識する。)

西の壁いっぱいに、ブルー・オーシャンがひろがる。

それは砂浜近くの明るい海水ではなく、海底の伺えない深海の青黒い海原である。

小島ほどもある巨大なうねりが押し寄せてくる。

その大うねりの海水の表面に、途方もなく巨大な翼ある生き物の影が映る。

それは鷲の翼のようである。

P Cは、祭壇の北に回り、北の方向に金牛宮のサインを描く。

P C：「アーニー・ポー (whb yn) われと名前なきもの)
アーニー・ポー (whb yn) われと名前なきもの)
エレッツ・カーナーニー (yn(nk Cr) カナンの地よ)」

全員：「エレッツ・カーナーニー (yn(nk Cr) カナンの地よ)」

北の壁いっぱいに、乾いた大地がひろがっている。

地平線の彼方には、雲をまといつかせた山脈が遠望できる。

彼方の雪の峰から手前にかけては、なだらかな丘陵地帯になっており、

その丘の上に角のある生き物の影が射す。

生き物は牡牛のように見える。

7 神性への四つの道

PCは、祭壇の西に回り、東面する。全員が東面する。

PCは右手を祭司の手のまま祭壇の上に高く掲げる。左手は脇に垂らし、手を握っている。右手の先端は、神殿の東壁の右側の上端を指している。

全員が祭司の手をつくり、右手をあげる。

PC：「神殿に十円図を投影する。」

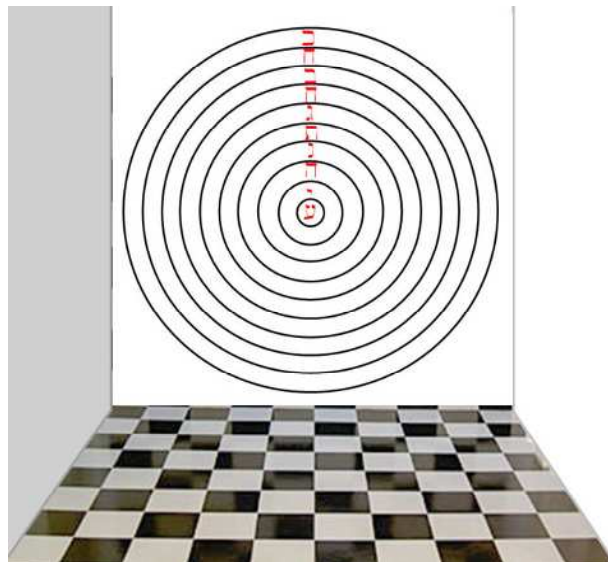
神殿の東側の壁一杯に「十円図」が出現する。PCは祭壇の棒を取り上げ、十円図の中央の円を指し、神殿の床に接した足下に脈動する光球を感じながら言う。

PC：「隠された道はマルクトに顕現する。花嫁の王冠たるアタラーなくして、有限のゼーは異邦人たるザールにはなりえず。われらは視線を下げ、アタラーに祈るべし。

hr+(1((オル・アタラー))

全員が右手の剣指をつくり十円図の中心を指し、神殿の床に接した足下に脈動する光球を感じながら言う。

全員：「hr+(1((オル・アタラー))



PCはティファレットの円とマルクトの円を逐次指し、足下の光球と、胸郭と腹腔の接する部分に脈動する光球を同時に感じながら言う。

PC：「秘密の道は二つの貌に顕現する。上位のセフィロトからティファレットへ、ティファレットからアタラーへ。二つの貌に心をとどむべし。

Nypwcrp wd 1((オル・ドウ・パルツフィン))

全員が右手の剣指でティファレットとマルクトの円を逐次指し、足下の光球と、胸郭と腹腔の接する部分に脈動する光球を同時に感じながら言う。

全員：「Nypwcrp wd 1((オル・ドウ・パルツフィン))

PCはケセドの円とゲブラーの円を逐次指し、右肩と左肩に脈動する光球を感じながら言う。

PC：「真実の道はゲドゥラーとベカドとの間にあり、二つの開口部をもつ。二つは六つを開きベシェトに至る。 Myxtp yn# 1((オル・シャニ・ベタキム))

全員が右手の剣指でケセドの円とゲブラーの円を逐次指し、右肩と左肩に脈動する光球を感じながら言う。

全員：「Myxtp yn# 1((オル・シャニ・ベタキム))

PCは最外周のケテルの円を指し、頭頂のさらに上に脈動する光球を感じながら言う。

PC：「正しき真実の道は神名のカバラ、カバラット・ハ・シェモースを超えた先にある。神知的性が降下し、人的知性に融合するとき、活動的知性は生まれる。人はそれを神的人間、イシャー・エロヒムと呼ぶ。われとともに秘密の名前を詠唱せよ。

)hwhy)hwhy (ヤアーヘヴァーフ ヤアーヘヴァーヒ))

全員がケテルの円を指し、頭頂のさらに上に脈動する光球を感じながら言う。

全員：「)hwhy)hwhy (ヤアーヘヴァーフ ヤアーヘヴァーヒ))

PCは棒を下ろし、左手を内側に胸の前に組む。

全員が、手を胸の前に組む。

PC：「なべて大いなるものは、
隠されしもの、秘密、真実、そして正しき真実を開示したり。
完璧なる主に伺候せる＜活動する知性＞シェカル・ハ・ボーイルこそ名前なり」

全員：「シェカル・ハ・ボーイルこそ名前なり」

全員が手を当てた胸にちりちりと皮膚を刺激する軽い痛みを感じる。胸の皮膚の上に、左胸から右胸にかけてヘブル文字ナン、サメク、アレフ、ナンが青く浮き出ている。正面から見るとニサンと読めるだろう。

PC：「祈りの声を聞かれない。偉大にして強大なる主よ。
高貴にして慈悲深き君よ、その眼差しは被造物にあまねく下される。
汝が従僕たる祈り手に向き直り、好意を持ち答えたまえ。
全宇宙の主よ、万物の造り主よ、宇宙の一者よ。
わが叫びに答え、天の門を開きたまえ。
汝が膝下にある貴顕の御名を召喚するものなり。」⁽²⁰⁾

PCが高らかに唄い始める。

PC：「リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー・シャーディー
(yd# Cwbq hyx) #y y1 汝が導きにわが望みを主よ。)
キー・ビー・ティー・シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー
(hyx) #y y1 yd# Cwbq 我が望みを主の導かれるままに。)
シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー
(Cwbq hyx) #y y1 yd# 主の導きに我が望みを。)」

PC：「サティームー・ヴェ・ゲー・リアー()ylgw Myts)」

全員：「隠され開示されたり。」

8 秋分の主祭

聖化した四方位の風に取り巻かれ、神聖なる貌の臨在のもと、秋分の秘儀に与るときが来た。

PC：「この場は、光と闇の至聖処なり。
今、頭上に秋分の太陽があり、
光は闇と均衡せんとしている。
われは律法の宰相として、
秋分の執行を宣言する。」

PCは、神殿の東側から中央を向いて言う。

PC：「祭壇に宇宙の軸を召喚せん。
I a H a V a H a (ヤアー・ハアー・ヴァー・ハアー)
H e V e H e I e (ヘイ・ヴェイ・ヘイ・イエイ)
V o H o I o H o (ヴォー・ホー・イヨー・ホー)
H I H V (ヘー・ヨド・ヘー・ヴァウ)」

PCが宣言する。

PC：「大いなる周行をもって、祭壇に集中せん。」

(20) James R. Davila, *Descenders to the Chariot*, Boston : Brill, 2001, p.113.

祭壇を軸として、3度周行する。

P C：「神秘なる周行は完成し、昼と夜は均衡した。秋分は到来せり。」

P Cは、祭壇の西に廻り、東に向かってホルスのサインを行う。

P C：「全き光に拝礼す。闇は光に内在せり。神殿の古きパスワードは・・・なり。」

P Cは、祭壇の東に立ち、西に向かってハーポクラテスのサインを行う。

P C：「深き闇に拝礼す。光は闇より生まれたり。神殿の新しきパスワードは・・・なり。」

P C：「パスワードは交換された。」

全員が祭壇を取り囲む。

P C：「腕を組み、手と手を取りて、われらのオーラをひとつに融け合わせよう。
無敵なる主の顕現にあずかりて、われらの靈魂をひとつとなし、
そをもちて、この神殿は栄光の場とならん。」

全員が手を組み輪のなかに祭壇を包み込む。

手を放すことなく次を唱える。

全員：「主よ。われらは自らを捧げん。

わが心臓と靈魂は、汝への絶ゆることなき供物とならん。

汝が御手の技の裔を受け、汝の意志のままに与え、奪いたまえ。アーメン。」

全員、東を向く。

全員：「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！

聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！

聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！

光と闇の主よ。」

9 諸天使の出立

P Cは祭壇の北に行き、南を向く。

P C：「律法の宰相の加護に感謝する。
靈の虚の場所に戻りたまえ。」

P Cは再度、祭壇の西に行き、東を向く。

P C：「聖なる五つの文字に表象される長老たちよ。

ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー（hw#hy）

万軍の将、靈の虚の場所に住まわん。

ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー（h#why）

戴冠せる王、靈の虚の場所に住まわん。

光と闇の轆轤を逆転し、魔術師の肉体を脱ぎ捨て、光へと帰還せん。」

P C：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。宇宙の韻律と調和に、感謝を捧げん。
主の聖靈は、森羅万象の上にあり、下にあり、内にあり、外にもある。
主よ、生ける靈と人の子らに、法悦と祝福を与えたまえ。
律法の宰相は、肉の衣を去れり。」

全員：「主よ、われらに祝福あれ。われらは絶えることなく汝を称えん。」

10 地上への帰還

PC：「人の子らよ。律法の宰相は、去れり。されば、地上に帰還せん。」

PCは《ヴェールを閉じる》サインを行う。

PC：「イエヘシュアーとイエホバシャーの御名において、
この儀式により拘束されし、すべての《霊》を解放せん。」

PC：「われは宣言する。神殿作業は終了せり。」

全員：「神殿作業は終了せり。アーメン。」

神殿の外へ出る。神殿の外庭でウシャブティを解放し、光の洞窟を通過して光体は自分の部屋に戻る。静かに肉体に戻る。四肢の感覚が戻ったところで、光の法衣を脱ぐ。（特別な手順は必要ない。）光の法衣とともに儀式中に刻印された封印、その他の印は精妙界に去る。

その後、静かに目を開き、立ち上がる。

法衣を着用している場合は、沈黙のうちに着替える。

普段着に戻り、儀式についての個人的メモ（『魔法日記』用）を終わるまで、この沈黙を続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

VERBORVM PVBLICA
I O S
RITVALE DE
AEQVINOCATIO AVTVMNO XIA

IMPRIMI POTEST : I O S
NIHIL OBSTAT QVOMINVS IMPRIMATVR
IMPRIMATVR : M.E.S.A. 5=6
SEPTEMBER MMXII

秋分儀式 A E 1 1 A

Copyrights © All rights reserved I O S 2012

2012年9月16日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の団員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。

表紙図版：フレデリック・グーダル「モーゼの発見」1885年